



第38回 日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会

モーニングセミナー 6

日常診療でよくみる皮膚症状には漢方を

日時

2022年 **4月24日** (日) 8:30 ~ 9:30

会場

かごしま県民交流センター (第7会場:東棟3F 中研修室2)

鹿児島市山下町14-50

座長

医療法人明和病院 皮膚科部長・にきびセンター長 **黒川 一郎** 先生

演題1

手湿疹に対する十味敗毒湯の効果 ～治療満足度を高める生活指導を含めて～

野村皮膚科医院 院長 **野村 有子** 先生

演題2

キレイが実感できる痤瘡治療と漢方薬

野本真由美スキンケアクリニック 総院長

野本真由美クリニック銀座 院長

野本 真由美 先生

※本大会は、現地開催および、同内容をリアルタイムでLive 配信させていただく、ハイブリッド開催を予定しております。
詳細は大会ホームページをご覧ください。(https://jocd38.jp/)

共催：第38回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会
クラシエ 薬品株式会社

手湿疹に対する十味敗毒湯の効果

～治療満足度を高める生活指導を含めて～

野村皮膚科医院 院長
野村 有子

略歴

1986年 慶應義塾大学医学部卒業
1986年 慶應義塾大学医学部皮膚科研修医
1988年 神奈川県警友会警友病院皮膚科
1990年 慶應義塾大学医学部皮膚科助手
1992年 神奈川県警友会けいゆう病院皮膚科
1998年 野村皮膚科医院開業
2003年 チャリオタワーに医院を移転
現在に至る

手湿疹、いわゆる手荒れは皮膚科医が診療する頻度の多い疾患である。外的刺激や接触アレルゲンが発症のきっかけとなるが、最近では感染予防のための頻回の手洗いや、アルコールでの手指消毒により悪化する患者が増えている。悪化することで、かゆみや痛み、見た目の悪さなどで、患者QOLは急速に低下する。

2018年に手湿疹診療ガイドラインが策定され、治療アルゴリズムが示された。まず原因を特定し、その原因との接触を除外すること、そして症状に応じて保湿剤やステロイド外用薬などを用いる。しかし、原因が特定できない場合や、原因を避けられない場合、ステロイド外用薬に対して治療抵抗性を示す場合など、治療に苦慮することも多い。タクロリムス外用や紫外線療法、痒みには抗ヒスタミン薬等が使われることもあるが、治療抵抗例に対する薬物療法の選択肢は少ないのが現状である。また、アトピー素因などの内因性因子が関与している例が多いことから、体質改善を促す治療も必要と考えられる。

十味敗毒湯には清熱や止痒などの作用があり、尋常性痤瘡、蕁麻疹などの皮膚疾患に幅広く用いられている漢方薬である。当院では、治療に難渋していた手湿疹に対して十味敗毒湯を用いたところ、症状並びにQOLの改善を認めた症例を経験した。

この講演では、治りにくい手湿疹について、当院で行っている漢方薬を取り入れた治療方法と、患者満足度を高める生活指導について紹介したい。

キレイが実感できる痤瘡治療と漢方薬

野本真由美スキンケアクリニック 総院長
野本真由美クリニック銀座 院長
野本 真由美

略歴

1998年3月 信州大学医学部卒業
1998年4月 新潟大学医学部付属病院皮膚科勤務
2006年3月 同退職
2006年4月 予防医学の勉強のため米国留学
2007年6月 野本真由美スキンケアクリニック 開院
2018年6月 野本真由美クリニック銀座 開院

日本皮膚科学会認定皮膚科専門医
日本東洋医学会認定漢方専門医
日本抗加齢医学会認定専門医
薬学博士

<所属学会>

日本皮膚科学会／
日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会／
日本美容皮膚科学会／日本化粧品学会／
日本東洋医学会／日本抗加齢医学会

<その他>

新潟美容・アンチエイジング研究会会長／
日本痤瘡研究会

日本には古来より、生体のバランスを整えて自然治癒力を高めることを得意とする漢方医学があり、この分野を痤瘡治療に取り入れると、従来薬の治療効果がより安定したり、副作用を回避しやすくなることをしばしば経験する。痤瘡に使われる漢方薬はさまざまであるが、当院では思春期後痤瘡の女性患者に対して桜皮配合の「十味敗毒湯」を中心に治療を行い、約8割の患者で効果がみられている。この桜皮配合の十味敗毒湯には従来から知られている抗菌作用に加えて、エストロゲン様作用、皮脂分泌の抑制作用、抗酸化作用、さらには創傷治癒を早める作用など、痤瘡治療の新たな作用メカニズムが解明されてきている

近年、過酸化ベンゾイルの登場により痤瘡治療の幅が広がったが、一方で皮膚刺激症状により治療が継続できないこともある。過酸化ベンゾイルやアダパレンの皮膚刺激をコントロールすることは今後の痤瘡治療の課題の一つであるが、十味敗毒湯は古来より皮膚炎にも効果があることが知られているため、こうした外用剤による刺激性接触皮膚炎も同時に軽減する可能性が高い。また、痤瘡は多因子疾患であるため、標準治療だけでは治療に難渋することがある。今回は痤瘡の増悪因子を、1.肌のバリア機能低下タイプ、2.皮脂分泌過剰タイプ、3.性ホルモンバランス異常タイプ、4.消化管トラブルタイプ、5.ストレス過剰タイプ、の5つに分類して、それぞれのタイプに応じた漢方薬の選び方について紹介する。